

体育会男子学生のパーソナリティ : 5 因子モデルに基づいた一般男子学生との比較

その他のタイトル	Comparison of Big Five Personality Traits among Male Athlete and non-Athlete College Students
著者	高岡 しの, 佐藤 寛
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	45
号	2
ページ	279-287
発行年	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/8407

体育会男子学生のパーソナリティ
— 5 因子モデルに基づいた一般男子学生との比較

高岡しの・佐藤 寛

Comparison of Big Five Personality Traits among
Male Athlete and non-Athlete College Students

Shino TAKAOKA and Hiroshi SATO

Abstract

Studies on personality traits of athletes have inconsistent results, even though they have used a variety of measures. The purpose of this study was to delineate personality traits that distinguish student athletes from non-athletes, based on the Five-Factor Model. Student athletes (188 males) and non-athletes (68 males) completed a questionnaire. Scores on each of the Big Five personality traits—Neuroticism, Extraversion, Openness to Experience, Agreeableness, and Conscientiousness—were compared between groups. Results showed that student athletes reported higher levels of Extraversion, Conscientiousness, and Agreeableness and lower levels of Openness to Experience and Neuroticism than non-athletes did.

Key words: Five-Factor Model, College Athletes

抄 録

アスリートのパーソナリティについては、様々な測度を用いて研究が行われてきているが、一貫した結果を得られていない。本研究では5因子モデルに基づき、体育会男子学生のパーソナリティ特徴について検討すること目的とした。大学の体育会部活動に所属する男子学生188名と一般男子学生68名を対象に質問紙調査を実施し、両グループの各パーソナリティ得点を比較したところ、体育会男子学生の方が一般男子学生よりも外向的、活動的であり、意志が強く、利他的に行動しやすい傾向があり、また伝統に重きを置き、権威主義傾向が高く、情緒的に安定している可能性が示唆された。

キーワード: Five-Factor Model, 大学生アスリート

問題と目的

スポーツ心理学において、パーソナリティは長年に渡って中心的なテーマであり、心理学者たちは、アスリートとして成功した者のパーソナリティを理解する試みを続けてきた (Allen, Greenlees, & Jones, 2013)。スポーツ心理学の研究が始まった20世紀の初頭には、性格傾向はスポーツ競技における発達や成功に影響を与える鍵となる要因とされていた (Griffith, 1930)。スポーツ心理学の研究が比較的停滞していたとされる1930年代から1960年代にかけての時期でも、スポーツとパーソナリティに関する研究は続いていた (Allen et al., 2013)。例えば、成功したスポーツ競技者のパーソナリティ (Thune, 1949)、パーソナリティの発達の変化と体育の成果 (Sperling, 1942)、スポーツ競技者と非競技者のパーソナリティの比較 (Carter & Shannon, 1940)、女性競技者のパーソナリティ (Fleming, 1934)、異なる競技間でのスポーツ競技者のパーソナリティの比較 (Booth, 1958)、スポーツ競技や運動への参加を予測するパーソナリティについて (Fauquier, 1940)、パフォーマンスの結果や質の決定因となるパーソナリティについて (La Place, 1954; Merriman, 1960) など、非常に多くの研究が行われてきた。

日本では、1950年代頃よりスポーツ競技者の性格や精神特性をテーマにした研究が、主に体育学の分野から行われてきている (e.g., 花田・藤善・河瀬, 1966)。1964年の東京オリンピックをピークに研究の数は減少したが、1988年のカルガリーオリンピック、ソウルオリンピックに向けて、(財)日本体育協会が競技者のためのメンタルマネジメントに関する研究班を組織し、性格の問題や適性に関して検討を行ってきた (佐藤・野呂・藤江, 1988)。またその後も、さまざまな競技種目における競技者のパーソナリティや特定種目のポジションとパーソナリティの関連を検討した研究、あるいは競技者のパーソナリティとパフォーマンスの関連の研究など、多様な観点から研究が進められてきた。

スポーツマン的性格に関するイメージを調査した花田・藤善・河瀬 (1965) では、一般的に感じられているスポーツマンの性格は「明朗であり、健康的で忍耐力がある」といったものとされている。実際のスポーツ競技者と非競技者を比較した研究では、大学の部活動における競技者の方が非競技者よりも神経症的傾向が少なく活動的であるといった報告 (平田・西尾, 1963) や、一般女子学生が劣等感や内向性が高いのに対し女子競技者は劣等感が低くまた活動的であるといった報告 (小川・松井・杉本・吉田・平野・鈴木・豊田・松田・道明・太田, 1964) がある。

また、特定の種目における競技者のパーソナリティについての研究も数多くなされてい

る。西尾・平田・滝沢・高島（1963）はハンドボールにおいてポジションによって性格が異なることを報告している。一方でアメリカンフットボールの選手を対象行われた調査では、性格とポジションには関連がなく、ポジションを決める際には身体的特性や能力が重視されていることが示唆されている（藤谷・谷田部・関・河野・青木，2005）。競技レベルとパーソナリティとの関連についてもいくつかの競技について検討されている。例えば、日本のプロ野球球団の一軍選手と二軍選手，アメリカのメジャーリーグ選手とマイナーリーグ選手のパーソナリティをそれぞれ比較した神田・平田・西尾・松井（1963）では、日本の一軍選手とアメリカのメジャーリーグの選手が、攻撃性や野心性，精神的，身体的精力性の高い人格型を示すと述べている。女子バスケットボール選手では，得点能力，ボール処理能力が上位のプレイヤーは下位のプレイヤーに比べて活発，活動的な特性を有しており，神経症的傾向が見られない（西尾・青井・平田，1963）といったことや，長身の選手は低身の選手に比べて，他人との社会的接触を避けようとする傾向にある（青井・西尾・滝沢・吉井・平田，1965）といった報告がある。高校サッカー選手を対象とした谷田部・河野・熊澤・青木・真邊（2003）では，全体として情緒・社会的不安定の高い選手が大半を占めていたが，レギュラーの選手は他の選手に比べて行動的でリーダーシップがあることが示された。さらに，バレーボール選手を対象とした研究では，楽天的なタイプの選手が多い傾向にあり，成績が悪かったチームの選手では他のチームの選手と比べて積極性や攻撃性，過敏性の高い選手が多いことを示すデータ（土谷・古沢・島津・白井・石橋・積山・水口・砂本，1980）や，男女とも高い外向性を示すものの，女子の方が男子よりも神経質で情緒不安定であるという結果（遠藤・栃堀・豊田・福原・都沢・上田，1985）が報告されている。同一競技内で男女差を検討した研究としては，吉村・出村・野島・岡島・勝木（1987）が馬術競技選手を対象に行った調査がある。その結果，男性選手は，活動的で協調性はあるが，愛想が悪く，のんきで支配性がない者が多く，女性選手は外向的で協調性の高い者が多いことが示されている。また近年では，スポーツ競技における怪我の有無とパーソナリティとの関連についても検討されている。藤谷・加藤・関・谷田部・寺脇・河野（2006）は大学生のアメリカンフットボール部員を対象に，外傷のある選手とない選手それぞれのパーソナリティについて比較検討したところ，外傷なし群に情緒が安定していて社会適応性や外向性の高い選手が多かったと報告している。

異なる競技の間や競技者と非競技者とのパーソナリティの違いに着目した研究も同じく1960年代より行われている。小川ら（1964）では，水泳や体操など5つの競技種目の選手と，スポーツを行っていない一般の女子大学生を対象に質問紙調査を行い，それぞれのパ

パーソナリティ特徴について述べている。また、体操競技選手と陸上競技選手のパーソナリティを比較検討した鈴木・小村（1981）では、両競技選手のパーソナリティが類似していることを明らかにしている。詳細に分析していくと競技ごとに少しずつパーソナリティの違いは確認されるものの、全体としては一般的に活動的、外向的なスポーツマンの性格が認められると結論づけられている（大浦・宮嶋，1984；石村・野田・青木，1993）。

これらの研究では、パーソナリティの測度としてY-G性格検査やミネソタ多面パーソナリティ目録（Minnesota Multiphasic Personality Inventory: MMPI）、モーズレイ性格検査（MPI）、内田クレペリン検査などを用いているが、研究間で結果の不一致が散見される（梶原・武良・松田，2001）。その理由の一つとして、パーソナリティ測度の誤用が指摘されている。例えば、MMPIは健常者のパーソナリティ測定用に開発されたものではなく、もとは精神障害の診断用に開発された性格検査であるため、健全な競技者のパーソナリティ分析に使用しても、その研究結果を見るときには注意が必要ながある（Singer, Hausenblas, & Janelle, 2001）。

近年の研究では、外向性（Extraversion）、同調性（Agreeableness）、誠実性（Conscientiousness）、情動安定傾向と神経症傾向（Neuroticism）、開放性（Openness）というパーソナリティの5つの基本次元（Big Five）が明らかになっており（Costa & McCrae, 1992; Goldberg, 1992）、5因子モデル（Five Factor Model: FFM）として知られている。Big Fiveは、特定の理論的な観点からトップダウン式に構成された概念ではなく、自然な言語を分析することからボトムアップ式に得られたものであり、人が典型的に違いを理解するための基本的で一般的な特徴を説明することができる（John, Naumann, & Sato, 2008）。

梶原ら（2001）では、この5因子モデルに基づいてアスリートと非アスリートのパーソナリティ特徴を検討している。その結果、アスリート群は非アスリート群よりも、外向性と誠実性が高く、開放性と調和性が低いことが認められ、神経症傾向については群間に有意差がないことが示されている。しかしながら、梶原ら（2001）では、アスリートという語を「日常的にスポーツに参加している個人およびその総体」と定義し、大学あるいは専門学校でサークル活動としてスポーツに参加している学生をアスリート群の対象者としたことが課題として残されている。サークル活動としてスポーツに参加している学生と体育会部活動に所属してスポーツに参加している学生とでは参加動機がまったく異なるという指摘もあるように（蔵本・菊池，2006）、サークル活動としてスポーツに参加している学生のすべてをいわゆる競技スポーツに従事するアスリートと見なすことには限界があると考えられる。

そこで本研究では、競技スポーツに従事しているアスリートとして、大学の体育会部活動に所属している男子学生に焦点を当て、非競技者の男子学生と比較することにより、体育会男子学生のパーソナリティ特徴について5因子モデルの尺度であるBig Five尺度を用いて検討すること目的とする。

方 法

調査対象者

調査対象者は関西地方の私立大学に在籍しており、体育会部活動に所属する男子学生188名（野球部97名、サッカー部61名、空手道部16名、日本拳法部14名、平均年齢19.5歳、 $SD=1.4$ ）と体育会部活動に所属していない社会学部の一般男子学生68名（平均年齢19.9歳、 $SD=1.0$ ）であった。

調査内容

フェイスシートにて、学年、年齢を尋ねたのに加え、体育会学生についてはさらに所属部活動と競技経験年数、レギュラーであるか否かについて回答を求めた。

また、パーソナリティの測定のためBig Five尺度（和田，1996）を使用した。この尺度は、欧米を中心に確立されてきたFFMを背景に、形容詞による性格特性を用いて比較的簡便に性格特性を測定するものである。情緒不安定性（Neuroticism）、外向性（Extraversion）、開放性（Openness to experience）、調和性（Agreeableness）、誠実性（Conscientiousness）の5因子、各12項目で全60項目から構成されている。「1.まったくあてはまらない」から「7.非常に当てはまる」の7件法で回答を求めた。

調査手続き

体育会学生に対しては、各部活動のミーティングの際に調査用紙を配布し、その場で回答を求めた。一般学生については、講義中に一斉に配布し、その場で回答を求め、回収を行った。

結 果

Big Five尺度の各因子得点について、体育会に所属している男子学生と一般男子学生の両群に差があるかを検討するために、対応のない t 検定を行った。外向性、誠実性、調和性の得点については体育会男子学生が一般男子学生よりも有意に高かったが（ $t_s [254] =$

Table 記述統計量とt値

	体育会学生 (n = 188)		一般学生 (n = 68)		t 値
	M	SD	M	SD	
外向性	56.80	11.17	53.03	7.69	3.04 *
情緒不安定性	43.77	12.38	52.69	8.16	6.66 **
開放性	48.64	10.41	52.54	6.56	3.55 **
誠実性	49.77	8.13	47.34	7.64	2.14 *
調和性	53.65	7.59	47.09	7.39	6.16 **

3.04, 2.14, 6.16, $p < .05$), 情緒不安定性と開放性の得点については, 一般男子学生の方が体育会男子学生よりも有意に高かった ($t_{s[254]} = 6.66, 3.55, p < .01$) (Table)。

考 察

本研究では, 5 因子モデルに基づいて, 体育会男子学生と非競技者の男子学生のパーソナリティ特徴を比較, 検討した。

得られた結果より, 一般男子学生に比べ体育会男子学生の方が外向性, 誠実性, 調和性の各因子得点が高かったことから, 体育会男子学生の方が一般男子学生よりも外向的, 活動的であり, 意志が強く, 利他的に行動しやすい傾向がある可能性が示された。また, 情緒不安定性因子と開放性因子の得点については, 体育会男子学生の方が一般男子学生よりも低かったことから, 体育会男子学生は一般男子学生と比較して伝統に重きを置き, 権威主義傾向が高く, 情緒的に安定している可能性が示された。花田ら (1966) では, スポーツマン的性格として「健康的である」「忍耐力がある」「明朗である」などが挙げられており, 測度は異なるものの, 本研究の結果もこれを概ね支持するものであると考えられる。

5 因子モデルに基づいて実施されたスポーツ競技者のパーソナリティに関する研究においては, スポーツ競技者は非競技者と比べて外向性が高く (Colley, Roberts, & Chipps, 1985; Egloff & Jan Gruhn, 1996; Paunonen, 2003), 情緒安定性が高く (Egan & Stelmack, 2003; Kirkcaldy, 1982; McKelvie, Lemieux, & Stout, 2003; Newcombe & Boyle, 1995), 開放性も高い (Hughes, Case, Stuempfle, & Evans, 2003; Kajtna, Tusak, Baric, & Burnik, 2004) ことが多く報告されている。また, Rhodes & Smith (2006) のメタ分析では, 運動への参加は外向性や誠実性との間に正の相関があり, 神経症傾向との間には負の相関があることが認められている。本研究でも, 外向性の高さ, 誠実性の高さ, 情緒安定性の高さ (情緒不安定性の低さ) などはこれらの知見と一致している。

しかし、体育会男子学生が一般男子学生よりも調和性が高く、開放性が低いというのは先行研究の結果と異なる。この理由としては大きく三点考えられる。第一に、本研究の対象となった一般男子学生は社会学部の学生であるため、データに偏りが生じている可能性がある。すなわち、各パーソナリティ指標の差が、体育会男子学生の特徴のみによって現れているのではなく、社会学部男子学生の特徴が反映されている可能性が考えられる。第二に、日本の大学の体育会における文化の影響を受けている可能性が挙げられる。開放性の低い者は伝統を重んじ、保守的、現実的な傾向があるとされているが（和田，1996）、大学の体育会においては規律や伝統、上下関係などが重視される傾向にあるため、体育会男子学生の方が一般男子学生に比べ開放性が低くなっていると推察される。第三に、体育会男子学生の所属部活動の影響が考えられる。本研究の対象となった体育会男子学生は野球部、サッカー部、空手道部、日本拳法部のいずれかに所属していたが、団体競技である野球部とサッカー部で対象となった体育会男子学生の数の7割強を占めていた。したがって、对人的志向や利他性を表す調和性が高かった可能性が考えられる。

近年では、5因子モデルの観点から競技者のパーソナリティを理解するだけにとどまらず、他の変数との関連も研究されつつある。例えば、木村・村山・田中・関矢（2008）では、スポーツにおける“あがり”について検討する際に、パーソナリティや原因帰属様式を考慮する必要があることを明らかにしている。また、パーソナリティがスポーツにおけるコーピングの選択やその効果、ストレスの強さなどに影響するといった指摘もある（Kaiseler, Polman, & Nicholls, 2012）。今後は、このように競技におけるメンタルマネジメントやコーピングなどへの応用を視野に入れたパーソナリティ研究が望まれる。

参考文献

- Allen, M.S., Greenless, I., & Jones, M. (2013). Personality in sport: a comprehensive review *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 6, 184-208.
- 青井水月・西尾貫一・滝沢英夫・吉井四郎・平田久雄（1965）. MMPI による運動選手の性格に関する一考察：バスケットボール・オリンピック選手について. *体育学研究*, 10, 103.
- Booth, E. G. (1958). Personality traits of athletes as measured by the MMPI. *Research Quarterly*, 29, 127-138.
- Carter, G. C., & Shannon, J. R. (1940). Adjustment and personality traits of athletes and non-athletes. *School Review*, 48, 127-130.
- Colley, A., Roberts, N., & Chipps, A. (1985). Sex-role identity, personality and participation in team and individual sports by males and females. *International Journal of Sport Psychology*, 16, 103-112.
- Costa, P. T., & McCrae, R. R. (1992). Revised NEO personality inventory and NEO five-factor

- inventory: Professional manual. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Egan, S., & Stelmack, R. M. (2003). A personality profile of Mount Everest climbers. *Personality and Individual Differences*, 34, 1491-1494.
- Egloff, B., & Jan Gruhn, A. (1996). Personality and endurance sports. *Personality and Individual Differences*, 21, 223-229.
- 遠藤俊郎・栃堀申二・豊田博・福原祐三・都沢凡夫・上田実 (1985). バレーボール選手の心理的適正に関する研究：性格特性, 競技意欲, 競争不安に着目して. 日本体育学会大会号, 36, 590.
- Fauquier, W. (1940). The attitudes of aggressive and submissive boys toward athletics. *Child Development*, 11, 115-125.
- Fleming, E. G. (1934). Personality and the athletic girl. *School and Society*, 39, 166-169.
- 藤谷博人・加藤晴康・関久子・谷田部かなか・寺脇史子・河野照茂 (2006). アメリカンフットボール選手の性格特性と外傷・障害発生率. 体力科学, 55, 910.
- 藤谷博人・谷田部かなか・関久子・河野照茂・青木治人 (2005). アメリカンフットボールにおける各ポジションの性格特性について. 体力科学, 54, 692.
- 藤善尚憲・花田敬一・河瀬雅夫 (1965). スポーツマンの性格について. 体育学研究, 10, 217.
- 花田敬一・藤善尚憲・河瀬雅夫 (1966). スポーツマンの性格について. 体育学研究, 11, 9-16.
- Goldberg, L. R. (1992). The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, 4, 26-42.
- Griffith, C. R. (1930). A laboratory for research in athletics. *Research Quarterly*, 1, 34-40.
- 平田久雄・西尾貫一 (1963). MMPIによるスポーツ選手の性格に関する研究：運動部リーダーについての一考察. 体育学研究, 7, 15.
- Hughes, S. L., Case, H. S., Stumempfle, K. J., & Evans, D. S. (2003). Personality profiles of Iditasport ultra-marathon participants. *Journal of Applied Sport Psychology*, 15, 256-261.
- 石村字佐一・野田政弘・青木隆 (1993). 石川国体ジュニア競技選手の心理的適性に関する縦断的研究. 金沢大学教育学部紀要 教育科学編, 42, 153-159.
- John, O. P., Naumann, L. P., & Soto, C. J. (2008). Paradigm shift to the integrative big five trait taxonomy: History, measurement, and conceptual issues. In O. P. John, R. W. Robins, & L. A. Pervin (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research* (3rd ed., pp. 114-158). New York, NY: Guilford Press.
- Kaiseler, M., Polman, R. C. J., & Nicholls, A. R. (2012). Effects of the big five personality dimensions on appraisal coping, and coping effectiveness in sport. *European Journal of Sport Science*, 12, 62-72.
- 梶原慶・武良徹文・松田俊 (2001). アスリートおよび非アスリートのパーソナリティ・パーソナリティ5因子モデルによる探索的調査. スポーツ心理学研究, 28, 57-66.
- Kajtna, T., Tusak, M., Baric, R., & Burnik, S. (2004). Personality in high-risk sport athletes. *Kinesiology*, 36, 24-34.
- 神田順治・平田久雄・西尾貫一・松井秀治 (1963). MMPIによるスポーツ選手の性格に関する研究：プロ野球選手についての一考察. 体育学研究, 7, 269.
- 木村展久・村山孝之・田中美史・関矢寛史 (2008). スポーツにおける‘あがり’の原因帰属と性格の関係. 人間科学研究, 3, 1-9.
- Kirkcaldy, B. D. (1982). Personality profiles at various levels of athletic participation. *Personality and Individual Differences*, 3, 321-326.
- 蔵本健太・菊池秀夫 (2006). 大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究：体育会運動部とスポーツ

- サークル活動参加者の比較. 中京大学体育学論叢, 47, 37-48.
- La Place, J. P. (1954). Personality and its relationship to success in professional baseball. *Research Quarterly*, 25, 313-319.
- McKelvie, S. J., Lemieux, P., & Stout, D. (2003). Extraversion and neuroticism in contact athletes, no contact athletes and non-athletes: A research note. *Athletic Insight*, 5 (3), 19-27.
- Merriman, J. B. (1960). Relationship of personality traits to motor ability. *Research Quarterly*, 31, 163-173.
- Newcombe, P. A., & Boyle, G. (1995). High school students' sports personalities: Variations across participation level, gender, type of sport, and success. *International Journal of Sport Psychology*, 26, 277-294.
- 西尾貫一・青井水月・平田久雄 (1963). MMPIによるスポーツ選手の性格に関する研究: 女子バスケットボール選手についての一考察. 体育学研究, 7, 271.
- 西尾貫一・平田久雄・滝沢英夫・高島洵 (1963). MMPIによるスポーツ選手の性格に関する研究: その2 男子高校ハンドボール選手のポジション別の差について. 体育学研究, 7, 270.
- 小川文子・松井三雄・杉本功介・吉田清・平野平三・鈴木克也・豊田章・松田岩男・道明博・太田哲男 (1964). スポーツ適性に関する研究: (1) 運動選手の性格特性. 体育学研究, 9, 400.
- 大浦隆陽・宮嶋郁恵 (1984). 本学のスポーツクラブ学生の性格特性及び体力について. 福岡女子短大紀要, 27, 21-32.
- Paunonen, S. V. (2003). Big five factors of personality and replicated predictors of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 411-424.
- Rhodes, R. E., & Smith, N. E. (2006). Personality correlates of physical activity: A review and meta-analysis. *British Journal of Sports Medicine*, 40, 958-965.
- 佐藤雅幸・野呂進・藤江学 (1988). S大学駅伝選手の性格特性: 精神健康度と競技成績からみて. 日本体育学会大会号, 39 (A), 201.
- Singer, R. N., Hausenblas, H. A., & Janelle, C. M. (2001). *Handbook of Sport Psychology*, New York: John Wiley & Sons, Inc. (シンガー・ハウゼンブラス・ジャネル 山崎勝男監訳 2013 スポーツ心理学大事典 西村書房)
- Sperling, A. P. (1942). Relationship between personality adjustment and achievement in physical education activities. *Research Quarterly*, 13, 351-363.
- 鈴木昭寿・小村渡岐磨 (1981). 体操競技選手の性格特性の一考察. 東海大学紀要 体育学部, 11, 19-28.
- Thune, J. B. (1949). Personality of weightlifters. *Research Quarterly*, 20, 296-306.
- 土谷秀雄・古沢久雄・島津大宣・白井徹男・石橋正博・積山和明・水口尚子・砂本秀義 (1980). バレーボール競技の体力・技術・競技成績及び性格特性との関係についての研究. 日本体育学会大会号, 31, 357.
- 和田さゆり (1996). 性格特性語を用いたBig Five尺度の作成. 心理学研究, 67, 61-67.
- 谷田部かなか・河野照茂・熊澤祐輔・青木治人・真邊一近 (2003). 高校サッカー選手における心理的変化の研究. 体力科学, 52, 1013.
- 吉村喜信・出村慎一・野島利栄・岡島喜信・勝木豊成 (1987). 大学生における馬術競技選手の性格特性について. 福井工業大学研究紀要, 17, 367-371.